

日本の温泉の歴史と文化(三) 日本の温泉文化と入浴文化の特色

日本で武士政権(徳川幕府)による江戸時代(1603年～1867年)に終わりを告げ、欧米型の近代化を導入した1868年の「明治維新」後、これまで温泉がなかった地域でも観光・入浴客を呼びこむ事業目的で掘削(ボーリング)による温泉開発が始まる。資金力のある開発事業者が望めば、地質調査にもとづく掘削の成功次第で温泉を得られる時代を迎えたのである。こうして明治時代(1868年～1912年)以降、日本の温泉文化も入浴の文化も大きな変容をせまられた。

とはいえ、日本の温泉文化の基本的な骨格を形作り、今日も確認できる特色がいくつかある。主な三つの点について紹介したい。

第一に、温泉信仰が挙げられる。温泉資源は本来、人間が生み出したものではなく、地球の産物である。したがって掘削による人工的な温泉開発が進むまでは、温泉がもたらす喜びや効果を「天与の恵み」として感謝する思いを日本人も大切にしてきた。

日本の温泉文化には、地上に温泉をもたらす自然(天)への畏敬と恵みへの感謝の念が基底にある。日本人は古来、自然界のあらゆるものに精霊・「kami(神)」が宿るという自然信仰を育んできた。温泉は「温泉(湯)神(yu-no-kami)」に守られていると考え、温泉地の泉源(湯元)近くに温泉(湯)神を奉る神社を設けている。

前に紹介した奈良時代の地誌『出雲国風土記』にもすでに、島根県玉造(Tamatsukuri)温泉の温泉(湯)神を奉る神社「玉作湯社」が記されていた。玉作湯神社は温泉街に現存している。10世紀初めの平安時代に全国の神社一覧を朝廷が記録した『延喜式』神名帳からは、「湯神社」「湯泉神社」などの名称を含む温泉神社が全国10箇所確認できる。



『延喜式』神名帳に記載された栃木県那須湯本温泉の温泉神社 (提供：石川理夫)

こうした自然信仰、温泉信仰は日本に限らない。たとえば、紀元前の時代にヨーロッパの先住民であったケルト (Celt) 人も、自然界のあらゆるものに神が宿るとみなしていた。とりわけヨーロッパ全土を覆っていた深い森とオークの樹、そそり立つ岩山、生命に欠かせない水や大地から湧き出る温泉・湧泉を崇めた。温泉・湧泉は女神が住む聖所とされ、奉納物を捧げたことが多数の出土品から明らかになっている。

第二に、6世紀前半に仏教が日本に伝来してからは、温泉文化に対する仏教の大きな影響が挙げられる。

とくに「人々を病から救う仏」とされる薬師如来は、疾病を癒す効果を期待された温泉と通じ合うことから、先の温泉神と相並び、温泉を守護する役割を託された。温泉神社と共に、温泉地には薬師仏を奉る温泉寺や薬師堂が建てられるようになった。日本の温泉信仰は、自然信仰に加えて仏教にも支えられている。



岐阜県下呂温泉の温泉寺(提供：石川理夫)

仏教の影響はそればかりではない。温泉入浴を含めた日本の入浴文化全般にも影響を及ぼした。その象徴となる簡潔な教典が、奈良・東大寺正倉院文書にも収められた『仏説温室洗浴衆僧経』である。入浴・温浴の功德と作法を説く同教典は、仏教寺院の湯屋・温室・浴堂で僧侶が修行の一環として入浴する場合だけでなく、一般の人々が入浴する際にも守るべき規範となった。それによると入浴時には男女とも「內衣(湯帷子)」(後の浴衣)を着用することを求め、裸での入浴を戒めていた。

それが時代を経るに従って、入浴時の內衣・湯帷子の着用は簡素化されていく。そして男性は「湯褌」を、女性は「腰巻」を下半身に着用することで済ますようになった。簡素化によるとはいえ、女性が胸部(乳)を隠さないことを疑問に思われるかもしれない。一般に入浴慣習は当該地域の宗教・信仰・社会規範、身体・性意識に規定される。欧米と比べて日本やアジア太平洋地域では、総じて女性の胸部は性的視線の対象というより、むしろ母性の象徴とみなされていたことが背景に考えられるのではないだろうか。



江戸時代の有馬温泉の湯具着用混浴図（『滑稽有馬紀行』より）

現在のように日本で男女共に手ぬぐい一つで入浴するようになったのは、1800年を前後する江戸時代後期からのこと。寺社詣でや「湯治」を名目に旅行が盛んになり、消費社会が爛熟して人々の気持ちが開放的に緩んだ時期である。そうした世相を反映していたと思われる。

それでも千年以上にわたり、温泉地の浴場でも街の銭湯にあっても、全裸ではなく何らかの湯具を身に着けて入浴していたことは、今日の日本人にもあまり知られていない。

日本の温泉入浴については、地方の「秘湯」的な温泉場や温泉療養客が多い湯治場などで裸の男女混浴が今も行われていることが海外観光客にも知られている。しかし、これも伝統的な姿が保たれているというわけでは決してない。述べたとおり、男女混浴の浴場でも長い間湯具を着用していたからである。また、江戸時代にも道後温泉や城崎温泉（兵庫県）、山中（Yamanaka）温泉や山代（Yamashiro）温泉（石川県）をはじめ多くの有名温泉地が男女別浴だった。男女混浴が当たり前、ではなかったのである。

そして明治時代になって西洋諸国の目を意識した政府が、浴場規則に「混浴・裸体露出の禁止」等を掲げた。しかし地方の温泉地については、付き添い介護入浴を必要とした温泉療養客が多く、規則でも当地の自主判断に委ねるとしたため、混浴は残された。

第三に、温泉資源の地域共同管理・利用がなお保たれていることも挙げられる。

最初に述べたように、地球の産物、天与の恵みの温泉資源は、人間が努力して創ったものでなく、元々は誰かの所有物でもない。したがって地域社会生活に欠かせない水利や山林同様に温泉資源を個人の私有に委ねず、村や地区集落といった地域総体で管理・運営し、共同で利用していく社会慣習が早くから育まれた。これは近年世界的に再評価されている「commons」概念と近い。

そこで入浴の場についても、地域総体で管理運営し、共同利用する浴場がつくられた。その名称は、明治時代以降は西洋社会の「共同・協同」概念が入ってきた影響を受け、共同浴場または共同湯と呼ばれている。それ以前は、村人の生活に欠かせない山林や水資源、祭祀にかかわる社堂、温泉資源などを村総体として「惣有」してきた歴史を背景に「惣(=総)湯」と呼ばれていた。



石川県山代温泉の共同浴場「古総湯」(提供：石川理夫)

この歴史的名称には、温泉を地域の総意で大切に持続可能なかたちで利用しようという思いが込められている。今求められる「SDGs」な温泉資源の利用法と言えるだろう。

以上紹介した日本の温泉文化と入浴の文化の主な特色は、有名無名を問わず現在の日本の多くの歴史ある温泉地に息づいており、温泉街の景観や建造物を通して確認することができる。日本の温泉の歴史と文化の視点からも温泉(地)を楽しんでもらいたい。

文 石川理夫